スローガン
信教の自由を守ろう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2016年（平成28年）
2月26日
第1075号

発行所
新宗教新聞
〒151－0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5588〈代表〉
大阪支社　〒550－0006大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

「信教の自由と立憲主義」平和学習会

全国展開へ

新宗連

第28期第6回

理事会 開く

新日本宗教団体連合会（新宗連、保積秀胤理事長）は2月17日午後1時20分から、東京・四谷の解脱会本部道場で第28期第6回理事会を開催した。平成28年度事業計画案並びに予算案を原案通り承認。新年度事業では、「信教の自由」と立憲主義を守り続けていくために「立憲主義の確立を求める運動」平和学習会を全国の総支部・協議会で実施していくこととした。

理事会は受け入れ教団を代表して解脱会理事長の岡野英夫理事があいさつ、続いて保積秀胤理事長があいさつ、議事に入った。

常務理事らの職務状況報告、北海道総支部の石井忠義会長（10月13日就任）の委嘱の後、報告事項に移った。昨年12月3日の内閣府による立入検査報告のほか、前回理事会（10月7日）以降の各委員会・機関、新日本宗教青年会連盟、総支部・協議会などの活動報告などを行った。

審議事項に入り、平成28年度事業計画案、予算案について審議し、原案通り承認。事業計画案は、前回の理事会で承認した「平成28年度事業大綱」に基づき、

理事会開会にあたり、保積理事長（中央）があいさつ。新年度に向け、新宗連と宗教者の役割を述べた（解脱会本部道場）

平成28年度 事業計画・予算を承認

作成したもの。企画委員会委員長の新井光興理事らが詳細を説明した。

「立憲主義の確立を求める運動」は、平成27年度に全国の総支部・協議会で実施した「新宗連活動の原点と歴史」学習会を踏まえ、全国で展開するもので、基本的人権の根幹にある「信教の自由」を守り続けていくために、憲法に基づき政治を行う「立憲主義」の確立を求めるもの。新たに作成した学習会用資料とパンフレット『信教の自由とは何か。』（『栞』参照）を教材として、全国の総支部・協議会で平和学習会を開催する。

このほか事業計画では、「第3回新生復興祈念集会」を5月16、17日に新潟県山古志地区で、「第30回教団人セミナー」を7月または11月に開催。「全国総会」は10月18、19日に奥羽総支部の受け入れで、岩手県盛岡市で開催する。

新井理事が、前回理事会で提案のあった新宗連スローガンの変更について、かつてのスローガンであった「国民皆信仰」を追加するという企画委員会での検討結果を報告。スローガンの文言・表記に関しては、現在の「～しよう」というスローガンと表記を揃える必要があることから、次回理事会において検討することを提案した。審議の結果、これを承認し、次回理事会までにスローガン案を企画委員会で検討することとした。

続いて、内閣府の立入検査で不備と指摘された諸規定について、文案を提示。審議を経て、一部修正し、これを承認した。また、委員会・機関の設置及び廃止に伴う事務作業軽減のために、『定款』第44条を一部変更することを承認した。

さらに、宗教法人審議会委員の石倉寿一常務理事が、2期満了となり同委員を退任することから、新たに飯島法道理事を同委員に推薦することを承認した。

また、今年6月24日で第28期が終了し、役員の交代が必要であることから、役員交代選考委員会を設置するために、臨時評議員会を4月5日に開催することを承認した。

すべての審議を終えた後、総支部活動について意見交換を行った。

学習会

説明を受け確認

資料やパンフを活用

新宗連は2月17日午後4時から、理事会終了後に学習会を開催した。これは、平成28年度事業計画の「立憲主義の確立を求める運動」平和学習会のデモンストレーションを兼ねたもの。

斎藤謙次事務局長と信教の自由委員会委員長の本山一博理事が、学習会用資料を説明。

斎藤事務局長は、『信教の自由と立憲主義―新宗連結成の精神に学ぶ』と題された資料を説明。昨年9月19日に安全保障関連法が成立したことを受け、「解釈改憲」による「立憲主義」の破壊が、「信教の自由」の侵害につながる可能性を指摘する内容であることを解説した。また、新宗連結成の精神が、「信教の自由」を守っていくことにあると強調した。

続いて、本山委員長は信教の自由委員会が作成したパンフレット『信教の自由とは何か。』（写真）を説明。「信教の自由」が誰にとっても重要なものであり、基本的人権の根源であることを解説。社会的な秩序と個人の自由のバランスを取ることの重要性を訴えた。

2人の説明の後、活発な意見交換がなされ、「左翼」「右翼」どちらにも偏らない新宗連のあり方について、真剣な討議を交わした。

今秋にACRP設立40周年シンポ

4項目の指針に基づき活動

第16回理事会・第11回評議員議案説明会

WCRP日本委

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（庭野日鑛会長、杉谷義純理事長）は1月27日午前10時半から、東京・杉並の立正佼成会法輪閣で第16回理事会・第11回評議員会議案説明会を開催した。

理事会では平成28年度の事業方針・事業計画、予算案などを審議し、原案通り承認した。事業方針・計画では来年度も「『他者と共に生きる歓び』のための祈りと行動」を総合テーマとし、4項目の指針（ネットワーク化、啓発・提言活動、平和教育・倫理教育、人道的貢献）に基づいて活動を展開する。

ネットワーク化の重要項目としては、アジア宗教者平和会議（ACRP）の設立40周年を記念し、10月に京都市で「宗教の名を使った暴力的過激主義（仮訳）」をテーマに記念シンポジウムを開催する。

また、今年度末でタスクフォース（特別事業部門）の任期が終了するため、次期タスクフォースのテーマを人道支援、核兵器廃絶・軍縮、持続可能な開発、平和・人権教育の4項目とする最終案を了承した。人道支援では「震災復興事業」を3年間延長することとしたほか、「難民問題タスクフォース」を新設。シリアやミャンマーなどの難民の現状について、支援方法や宗教者の役割を探っていく。

「核兵器禁止条約締結に向けた取り組み」では、今年が国際司法裁判所（ICJ）による核兵器使用を違法とする勧告的意見表明と、包括的核実験禁止条約（CTBT）締結から20年を迎えることから、7月に宗教指導者と専門家による会合を実施する。また核軍縮・不拡散議員連盟（PNND）や平和首長会議のメンバーらとも連携し啓発活動を行っていく。

理事会は評議員会議案説明会と併せて開かれ、理事会後に開催された第11回評議員会で、理事会承認事項を決定した。

諸宗教者が

署名活動開始

北東アジア非核兵器地帯の設立に向けて

深刻化した北東アジア情勢を打開するため、日本の宗教者が、北東アジア非核兵器地帯の設立に向かうことを求める署名活動を行うことが、2月12日に発表された。

同署名活動の呼びかけ人は日本キリスト教協議会（NCC）議長の小橋孝一氏、元天台宗宗務総長でWCRP軍縮安全保障常設委員会委員長の杉谷義純氏、カトリック長崎大司教区大司教の高見三明氏、浄土真宗本願寺派僧侶の山崎龍明氏の4人。協賛はWCRP日本委員会。

会見で署名活動の意義を語る呼びかけ人

署名活動呼びかけ文では、核兵器はいかなる使用も壊滅的な人道上の結末をもたらすもので、宗教的価値、道義的原則、そして人道法に反するとして「宗教者にとって核兵器の禁止と廃絶は、神聖な責務」と述べ、北東アジアの非核兵器地帯の設立が日本の安全を確保しつつ、「核の傘」から出ることを可能にする政策であることを訴えている。

署名活動開始にあたり、12日午後3時から、東京・永田町の衆議院第2議員会館で記者会見が開かれ、小橋NCC議長と山崎氏、杉谷氏代理としてWCRP日本委シニアアドバイザーの神谷昌道氏、NPO法人・ピースデポ副理事長の湯浅一郎氏が、署名活動に至る経緯や活動展開に寄せる思いを語った。

同署名活動についての連絡先はピースデポ（E-mail：office@peacedepot.org ☎045－563－5101 FAX045－563－9907）

アマゾン「お坊さん便」問題

販売中止の要望決定

全仏 理事会を開催

全日本仏教会（全仏、加藤精一会長・齋藤明聖理事長）は1月26日午後2時から、東京・芝公園の明照会館で第31期第13回理事会を開催した。昨年12月から懸案となっていた、インターネット通信販売大手アマゾンジャパンの葬儀紹介サイト「お坊さん便」について、米国のアマゾン本社並びに日本法人に販売中止を要望することと、全仏内に一般の声に応える「（仮称）法務執行相談に関する協議会」の設置を決定した。

「アマゾンジャパン」の「お坊さん便」は、葬儀に際しての僧侶派遣サービスで、法事や僧侶の手配チケットを販売するもので、その中で定額の布施費用を明示している。全仏は昨年12月24日、齋藤明聖理事長名の談話で「宗教行為を商品化するもの」と疑義を表していた（前号1面既報）。

現在、全仏ではアマゾンへの要望書（英語・日本語）の作成作業を進めており、作成され次第、提出される。また、「（仮称）法務執行相談に関する協議会」については、新役員体制が決定する4月以降に新設されることとなる。

理事会では、全仏が来年創立60周年を迎えることから、その記念事業のテーマ「ご縁をかたちに、絆を行動に―私からはじまる」などを承認した。

滴々抄

人の思い忘れずに

稽古照今人、温故知新人

「八甲田、十和田、摩周、羊蹄」丸、「はつかり、白鳥、はまなす」

昨年、勇気と希望をくれたラグビー日本代表ではなく、野鳥や山野草でもありません。

昭和63年3月、青函トンネルが完成し、陸続きになり、同日、青函連絡船が役目を終えました。平成28年3月26日には、北海道新幹線の開業が決定し、また新たな歴史が引き継がれます。

時代と共に、時間の感覚が変わります。青森・函館間は、青函連絡船が約4時間、津軽海峡線が約2時間、北海道新幹線は1時間1分と大きく変わります。

当教団は青森県平内町の山奥にあり、交通が便利ではありません。行事のたびに、北海道の方は前夜に出発し、早朝5時前に青森。在来線、車と乗り継ぎ、本部到着。道内移動を考えると、10時間以上の長い道のりです。

時代と共に、便利になり、時間が短縮される中、自分自身に欠けていることがあるのではないだろうか。

稽古照今、温故知新という言葉に、人という一文字を加え、稽古照今人、温故知新人として、人と人との祈り合う間にいる人間の思いを忘れず、尋ねていくことを教えていただいた時間でした。

（田澤清喜・松緑神道大和山教主）

ある時、信者さんにお聞きました。「遠いところ、ありがとうございます。大変だったでしょう」。そうすると「道中、お弁当食べながら、お茶飲みながら、皆で信仰の話をずっとしてくるんです。それが楽しみです」と満面の笑みで応えてくれました。

「大変だったでしょう」と掛けた言葉は合っていたのか、ふと疑問に感じました。社交辞令的に掛けたのか、相手をしっかり分かって掛けたのか。

時代と共に、便利になり、時間が短縮される中、自分自身に欠けていることがあるのではないだろうか。

稽古照今、温故知新人

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

栞 しおり

パンフレット『信教の自由とは何か。』

同パンフレット（B5判8頁、カラー）は、新宗連信教の自由委員会が中心となり検討を重ね、2月初旬に新宗連から刊行した。基本的人権の根幹である「信教の自由」について、Q＆A形式（11項目）をとり、一般の人にもわかりやすい文章と内容構成で、その意味と重要性を解説し、新宗連の考えを示している。今後、全国の新宗連総支部・協議会へ順次配布され、各地で開催される平和学習会の教材の一つとして活用される。（1面）

現代世界と宗教の課題
―宗教間対話と公共哲学―
星川啓慈・山脇直司・山梨有希子・濱田陽・田丸徳善 著
環境・貧困・紛争などの現在の地球的危機に対して宗教は無関心でいられないばかりか、その解決のための公共的責任を負う。各宗教は問題解決のため、その独自性を尊重しつつも、協働しあえるヴィジョンの追求のために対話しなければならないことを訴える。
四六判上製・定価2310（税込）
蒼天社出版
〒112-0011 文京区千石4-33-18
TEL 03-5977-8025 FAX 03-5977-8026

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
老春(ろうしゅん)謳歌(おうか) 長生きの秘訣
御木徳近著
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家として悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

法律文化社
宗教関係者必携の書
石村耕治編著
宗教法人法制と税制のあり方
A5判／260頁／3150円
●信教の自由と法人運営の透明性の確立
公益法人制度改革が進められるなか、宗教法人が社会的責任を果たすために、いま何が求められているのか。宗教法人法制と税制のあるべき方向と今日的課題を提示する。
京都市北区上賀茂☎075（791）7131（税込）

奉祝!! 第62回 神宮式年遷宮
神宮祭祀の研究 中西正幸（国学院大学教授）
伊勢の神宮では、四季の彩りゆたかな恒例・臨時の諸祭典がとり行われている。そうした祭祀の源をたどると、おく神祇令に神嘗祭と神御衣祭とを初見し、神宮最古の文献というべき延暦二十三年（八〇四）の両宮儀式帳に、一年中恒例祭式年遷宮祭を掲げる。祈年祭・三節祭・踐祚大嘗祭などの主たる祭祀が古代において成立したことを前提として、本書では神宮の年中行事、恒例祭・諸祭・行事、式年・臨時祭、御料・職役、明治新祭式について多数の写真・図版で神宮祭祀に関する論考を集大成。
一二六〇〇円
神宮式年遷宮の歴史と祭儀 中西正幸
神宮における遷宮関係の技術と知識の集積は、千三百年にわたる式年遷宮の歴史と伝統に相応しく、それこそ〈千古の生きた伝統の結晶〉の奥深さがあろう。殊に神宮文庫に所蔵される典籍・記録類は夥しく、しかも貴重なものである。本書では、神宮式年遷宮を総説・歴史・祭儀・造営・神宝の諸領域に分け、その現状と課題を概観。平成十年〈大明堂刊〉の復刊。五二五〇円
国書刊行会 TEL 03-5970-7421 FAX 03-5970-7427
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
http://www.kokusho.co.jp（税込価）

著者自らが関わった借金脱出の実話を元に奇想天外なタッチで描いた愉快な実用小説
友を救う 太田哲二著
●推薦 清水康市（NPO東海事業支援機構理事長）
中小企業金融円滑化法は失効目前。銀行は、もう持ってはくれません。決断と再生の時です。再生ノウハウの一端が楽しく記載されています。
アートアンドブレーン 1900円＋税
〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北1-8-22
電話03(5327)3766
お求めは、著者へ直接も可
携帯 090-9248-0845
FAX 03(3332)0672
PCメール info@ota-tetuji.jp

ひろさちやの『法華経』シリーズ！
【最新刊】
『法華経』日本語訳
ひろさちや ◎四六判上製 ◎定価1944円
当代きっての仏教解説者による『法華経』全28品の現代語訳。平易に親しんで読み進められるように、煩雑な逐語訳でもなく、原義を損ねる超訳でもない、斬新な翻訳スタイルで綴る。巻末に用語解説を収録。
【好評既刊】
〈法華経〉の世界
ひろさちや ◎四六判上製 ◎定価2160円
伝統的解釈にとらわれず、『法華経』を虚心坦懐に読むための案内書。
佼成出版社
東京都杉並区和田2-7-1〈定価税込〉
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
http://www.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、「合掌ができない子どもたち」との出会いを契機に、「戦後の日本社会が戦慄すべき一薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに出現した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

東日本大震災

復興の現状と課題 学ぶ

東北ピースフォーラム

青関連・青東北連

新宗連青年会

新日本宗教青年会関東連盟(青関連、鎌形至委員長)と新日本宗教青年会東北連盟(青東北連、浅野俊一委員長)は合同で2月13、14日、宮城県で「東北ピースフォーラム」を開催した。同フォーラムは、青関連が4年前から続けている東日本大震災被災地域への支援活動を拡大し、昨年度より青東北連と合同で開催しているもの。

13日午前8時半に青関連からの参加者は東京駅をバスで出発し、午後1時過ぎに津波の被害に遭った宮城県亘理郡山元町の青巣稲荷神社で青東北連の参加者と合流、同神社を参拝した。

同町にある曹洞宗普門寺に移動し、境内の「東日本大震災犠牲者供養塔」において、慰霊祭を執行した。

この後、同寺住職の坂野文俊氏から住職となった経緯、東日本大震災時の経験、その後の復興の歩みなどについて話を聞いた。

坂野住職の問いかけに答えながら、学びを深めた

坂野氏は、震災直後に被災した人々に声をかけられない自分に無力さを感じ、何もできなかったという。そのような中、「できれば(この地に)墓を残したい」という檀家の一人の声から、墓地の整備を始める。資金がない中、石材店から重機を借り、自力で流された墓石を戻し、施餓鬼供養を行い、予想以上にたくさんの人が集った。「宗教、先祖がいかに大切で、いかに生きる力となっていたのかが分かり、涙が止まらず、お経が読めなくなった」と話し、この法要によって同寺の再建を確信したという。

本堂を再建し、今は月一回の無料カフェ「てら茶房」を開いている。「復興はまだまだ」「大事なのは心」と話し、人の心に寄り添う「傾聴」の重要性を訴えた。災害時には宗教の区別を超えて協力すること、災害の現場を「見る」ことの大切さを参加者に説いた。

14日午前6時から、仙台市にある大和教団(保積秀胤教主)の大國神社を正式参拝し、保積志胤統理から同神社の説明を受けた。同7時半に名取市の閖上港を訪問し、ゆりあげ港朝市共同組合代表理事の櫻井広行氏から、津波から得られた教訓や命を守るための術を学んだ。同9時半に名取市議の荒川洋平氏と合流し、日和山湊神社を参拝。日和山に隣接する「東日本大震災慰霊碑」を参拝し、黙祷を捧げた。

荒川氏から名取市の復興・防災計画を聞きながら、市内を巡り、復興状況などを視察した。荒川氏は、迅速な決定を下した自治体が早く復興を遂げ、決定が遅れた自治体の復興が遅れていることを話し、今後の課題などを説明した。この後、質疑を行い、参加者は東日本大震災当日のこととともに、その後の復興状況についても学びを深めた。

鶉野飛行場(兵庫県加西市)で平和学習会

青近連

新日本宗教青年会近畿連盟(青近連、栗原克彦委員長)は2月7日午後1時から、兵庫県加西市の鶉野飛行場資料館で平和学習会を行った。

鶉野飛行場は、太平洋戦争中、旧日本海軍が当時の兵庫県加西郡九会村と下里村にまたがる広大な鶉野台地に建設した。姫路海軍航空隊が1943(昭和18)年10月に設立され、飛行場建設にあたって250万平方㍍が買収され、今も1200㍍の滑走路が残る。周辺には防空壕などの戦争遺跡も残っており、現存する中で国内最大。

講師の説明を真剣に聞き入る参加者

地元の戦史研究家の上谷昭夫氏を講師に、館内で鶉野飛行場の成立から戦争末期までの説明を受け、参加者は当時の状況を学んだ。飛行場建設には1日3000人以上が携わり、10年かかるといわれていた工事を1年で完成させた。

続いて、資料館から程近い場所にある「鶉野平和祈念の碑苑」で、パーフェクト リバティー教団、大慧會教団、立正佼成会の順に教団別礼拝を行った後、全員で黙祷を捧げた。飛行機の形をした碑の裏には鶉野から出陣し、沖縄近海で亡くなった隊員63人の名前が刻まれている。

この後、神風特別攻撃隊・白鷺隊の出陣で別れの盃が交わされたエプロン(駐機場)跡や地下指揮所跡、衛門詰所横の防空壕跡、弾薬庫跡、対空機銃座跡などの周辺の戦争遺跡群を、解説を受けながら見学した。

法華経を伝え、幸せ導く

開教78周年記念式典

思親会

布教の決意語る飯島会長

思親会(飯島法道会長)は2月11日午前11時から、神奈川県伊勢原市の思親大宮殿で「開教78周年記念式典」を厳修した。思親会は1938(昭和13)年、井戸清行開祖(思親清行大士)により、法華経を所依の経典とする在家仏教教団として開教された。

第1部は、飯島法道会長を導師に読経供養を厳修。午後1時からの第2部では、「会員綱領」唱和に続いて本尊授与式、辞令交付式、感謝状授与式が行われた。この後、神奈川県厚木支部の地場美恵子氏と煎木千恵子氏が会員を代表し法話。登校拒否となった子どもと向き合い法華経を一心に信じ、行じる中で問題が解決していった体験を語った。

続いて飯島会長が「ご親教」。開教78周年を迎えた喜びを述べた後、「思親会の最大の使命は、多くの人々に法華経の素晴らしさを伝え、幸せに導いていくことです」と述べた。また「凡霊二界の浄化」の重要性を強調し、日々法華経を読誦する中で、心を込めて先祖を供養するとともに、自らの姿を反省し、相手の幸せを祈り続ける修行の大切さを説いた。

さらに「一天四海皆帰妙法」の意味を解説し、「これから海外にも教えを伝えていきます」と布教への決意を語った。

戦跡巡り冥福祈る

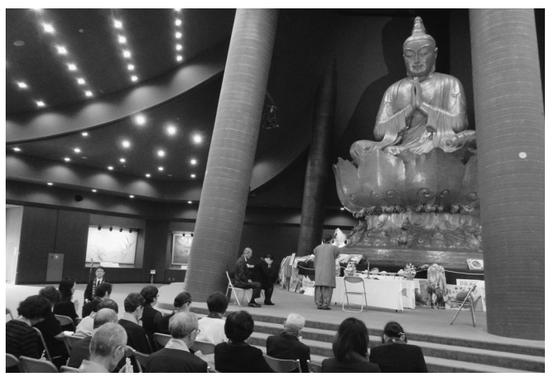
沖縄慰霊と平和祈念の旅

大和教団

大和教団(保積秀胤教主)は2月13日から3泊4日の行程で「沖縄慰霊と平和祈念の旅」を実施。保積秀胤教主はじめ21人が参加した。同企画は、教団の今年の特別行事として催された。

13日午後、仙台空港から那覇空港に到着。那覇市の首里城を訪れ、琉球国王居城の遺跡を訪問した。14日は午前に、日本軍が沖縄戦の終焉を迎えた糸満市・摩文仁の丘にある平和記念公園を訪れ、各県の慰霊塔に献花し参拝。この後、世界に平和を訴えるモニュメント・平和祈念堂で、沖縄戦犠牲者をはじめ南方海域に眠る「御霊」の冥福を祈り黙祷を捧げ、保積教主を斎主に「大和教団特別慰霊祭」を斎行し、真心から慰霊の誠を捧げた。

祭儀後、保積教主が「お言葉」を述べた。冒頭、今回の旅が昨年5月下旬、新日本宗教団体連合会(新宗連)が実施した「戦後70年—平和への巡礼・第7回沖縄平和祈念堂で特別慰霊祭を斎行」



平和祈念堂で特別慰霊祭を斎行

祈ってください〟との霊界からの思いが日増しに強くなっていきました。これから出来得る限り、御霊様たちの思いを伝え、迷惑にならないような形で慰霊というものを為していきたいと思います」と述べた。

午後は、沖縄戦で南風原陸軍病院の特志看護婦として動員され136人が犠牲となった「ひめゆり学徒隊」の慰霊塔・ひめゆりの塔を訪れ、拝礼。この後、ひめゆり平和祈念資料館を見学し、戦場の惨状を伝える数々の資料に、戦争の恐ろしさを語り継いでいく大切さを痛感した。続いて、豊見城市の海軍戦没者慰霊之塔を訪れ拝礼、旧海軍司令部壕を見学した。

15日は、沖縄本島で戦前から唯一残る寺院といわれる金武町の金峯山観音寺の参拝、世界遺産・今帰仁城跡などを訪問した。最終日16日は恩納村の景勝地・万座毛と琉球村などを見学し、無事帰郷した。

大乗を念じる大切さ

立教65年祭

妙道会教団

佐原会長による祭文奏上

妙道会教団(佐原慶治会長)は立春となった2月4日、大阪市天王寺区の本部・大聖堂で「立教65年祭」を執り行った。

色鮮やかな花々で荘厳された「ご法殿」を前に、正装の会員が着座。午前10時半、堂内が暗転し、ドヴォルザークの「新世界」第2楽章とともに、立教65周年の新たな幕が開けた。

三帰依文の調べの中、黙念合掌し、6人の女子部員が献灯。導師入場の後、佐原慶治会長が祭文を奏上した。65年の来し方に感謝し、決定も新たに読経を行った後、導師位授与、教会役員・青年部役員委嘱の儀を迎え、代表者がそれぞれ佐原会長から授与、任命された。

堂内が暗転し、静想の後、佐原会長が登壇して、ご教示。立教記念日の意義とともに、大乗を念じることの大切さを語りかけた。最後に聖訓・三大誓願を奉唱した後、声高らかに会歌を斉唱。立教記念日を寿いだ。

参拝者にはご神酒「瑞祥」と招福餅が手渡されたほか、修導師以上の導師には、両聖師の故事に因む記念の「おうどん」が手渡され、大法宣布、思想善導の決意を固める一日となった。

大日本精神、次世代へ

太陽精神碑建立記念祭

解脱会

東京・四谷の解脱会(岡野聖法主)は2月11日午前10時から、埼玉県北本市の太陽精神碑前と御霊地で「第77回太陽精神碑建立記念祭」を斎行した。

太陽精神碑前に岡野聖法主らが整列し、第1部「太陽精神碑前之儀」を挙行。開式の辞、拝礼の後、岡野法主が精神碑前に進み、「奉告文」を奏上し、拝礼行事を行った。

「御霊地」に会場を移し、午前11時から第2部「太陽精神碑建立記念祭式典」を開式した。拝礼の後、全員で国家と「太陽精神碑の歌」を斉唱。教えの根本「五法則」について説いた岡野聖憲会祖(解脱金剛尊者)の「み声」(録音)を拝聴した。

岡野法主が会場中央に建てられた「日の丸」に向かい、「祈願文」を奏上。「み教え」を宣布し、岡野会祖が示された「大理想」を奉戴して日本の繁栄と世界平和建設に貢献し、「歓喜大躍進」することを誓った。

精神碑に向かい、岡野法主が「奉告文」を奏上

拝礼行事の後、岡野法主が会場特設ステージに登壇し、「式辞」。太陽精神碑が1940(昭和15)年、神武天皇即位紀元2600年に建てられたことを説明し、そこに込められた岡野会祖の思いに触れ、「解脱」することの大切さと難しさを説いた。

また、同日が建国記念日であることに触れ、日の丸が正義と公平を示し、あらゆる民族を差別せずに照らす太陽(大日本精神)を象徴しており、太陽精神碑は大日本精神を形にしたものであると説明。「大日本精神すなわち解脱精神を自らに培うとともに、家族に伝え、次世代に確かに受け継がれるよう、努めてまいりましょう」と参列者に呼びかけた。

この後、来賓祝辞、来賓紹介、会歌斉唱と続き、岡野英夫理事長が登壇し、万歳三唱を行い、閉式となった。式典後は直会が催され、甘酒や五色うどんなどが振る舞われた。

多寶佛塔の上棟式

年末に完成予定

大慧會教団

大慧會教団(石倉恒男会長)は2月3日午前11時半から、大阪府堺市の本部で多寶佛塔の「上棟式」を執り行った。

石倉寿一次代会長導師のもと、点鐘、礼拝、玄題三唱を行った。続いて「降神の儀」を行い、石倉恒男会長が慶白文を奏上した。大乗経典を読誦し、「上棟の儀」に移った。石倉会長直筆の棟札を、石倉次代会長が祭司から受け取り(写真)、多寶佛塔の相輪に納めた。代表礼拝は施主の石倉会長、昭栄設計事務所、関本工務店の代表が行った。

「昇神の儀」の後、石倉会長が施主あいさつに立ち、「今日の上棟式を迎えられることがとても嬉しい。この多寶佛塔はご先祖様の家として、そしてご先祖様を敬う私たちのよりどころとして建立させていただきます。事故が無く完成することを祈りたい」と述べた。

なお、多寶佛塔の完成は本年末を予定している。

幹事研修セミナー

法公会を訪問 沿革や教義学ぶ

同推協

新宗連同和推進連絡協議会(同推協、生田茂夫代表幹事)は1月25、26日に「幹事研修セミナー」を開催し、愛知県知立市の法公会(榊原光徳会長)への教団訪問と定例協議会を行った。

25日午後2時半から、「本殿」を参拝し、大橋法厚副会長から、教団の沿革や教義の概略の説明を受けた。続いて、杉山辰子教祖の像が安置されている「教祖殿」や「聖仏舎利宝塔」を参拝。また、師祖である柴垣法隆師と先代会長の榊原法公師が描かれた絵画などが展示されている「美術館」を見学した。

師祖、先代会長の絵画などを見学

この後、平成27年度第2回定例協議会を開催し、3月上旬に開催する第27回人権啓発基礎講座と平成28年度事業計画推進について審議を行った。

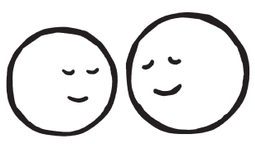
【諮会議　報告】

理事会へ向け、平成28年度予算案を作成　会計委

新宗連会計委員会(中村憲一郎委員長)は1月26日午後3時から、東京・代々木の新宗連会館で第28期第3回会計委員会を開催した。

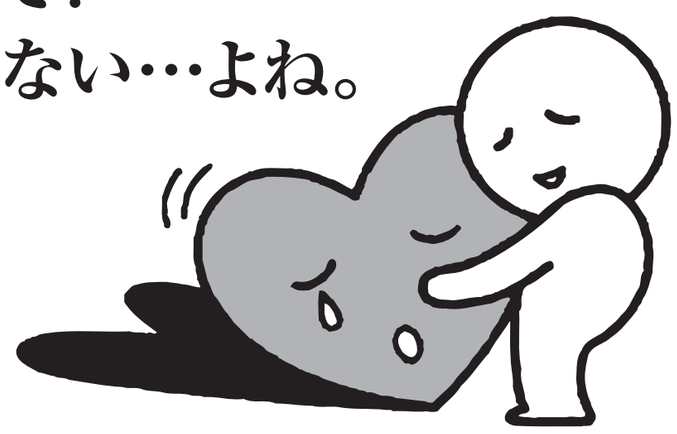
委員会では「平成28年度予算案」を協議し、2月17日に開かれる理事会に提出する同予算案を作成した。

ひとりで悩まず電話して!
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。



●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です(通話料はかかります)。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から翌朝6時まで
火曜のみ午後5時から翌朝6時まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040　(FAX 03-3207-5098)

●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター　06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター　0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター　019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前4時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター　0568-70-9090　毎週土曜、午前0時から午前5時まで

「福は内！」

各地で人々集う 節分行事

厄除 招福 諸願成就

「心の鬼を追い出そう」
福聚の会

福聚の会（杉浦妙周会長）は1月31日午前10時から、愛知県知立市の本部・大乗山法隆寺で「平成27年節分会」を執り行った。

杉浦妙周会長が厄除祈願者に厄払いを行った後、あいさつ。「季節の節目に人間が持つ欲望、心の鬼を追い出し、福を守るのが節分」と説いた。この後、教団役員が扮した赤鬼、緑鬼が登場。子どもたちとバナナの早食いなど触れ合いながら、親の言うことを守るよう諭した。豆まきは杉浦会長と年男・年女の会員らが威勢よく行い、日用品の景品交換会もあり盛況となった。

「お天道様が見ている感覚で」
八津御嶽神社

八津御嶽神社（山本行德宮司）は1月31日午後2時から、東京都中野区の東京本部で「節分やくよけ祭」を執り行った。祭主の山本行德宮司が節分祭祝詞を奏上後、年男年女、厄年の信徒らが祓いを受けた。

祭主豆打ちの儀の後、山本宮司が教話に立ち、「本日参拝の皆さまは、神様に近づかれた方です。昔の日本には、お天道様（神様）が見ているという感覚がありました。このような考え方ができるかどうかで、幸不幸が決まってきます」と説いた。この後、豆まきが行われ、賑わいを見せた。

「皆さんと共に修行を」
妙智會教団

妙智會教団（宮本惠司法嗣）は2月3日午後1時から、東京・代々木の本部本殿をはじめとする各教会・道場で「節分追儺式」を厳修した。

本殿では、宮本惠司法嗣を導師に「玄題三唱」し、宮本法嗣が「ご祈願」。全員で読経を行った。

宮本法嗣はあいさつで、今年が還暦、厄年を迎えることを伝え、「厄に負けず、皆さんと共に修行させていただきたい」と力強く述べた。

「追儺の儀」に移り、宮本法嗣と来賓が参列者に豆や紅白の餅をまき、会場は大いに盛り上がった。

真剣による「お究呪の法」
大慧會教団

大慧會教団（石倉恒男会長）は2月3日午後零時20分から、大阪府堺市の本殿講堂で「第65回節分祭」を執り行った。

石倉寿一次代会長が真剣による「お究呪の法」を行い、病魔、悪魔退散、厄払い、諸願成就を祈願した。石倉恒男会長の「ご法話」の後、「福寿豆撒の儀」に移り、白衣を着た石倉次代会長らが、壇上に整列し、題目を唱えて、福豆を祈祷。

紙袋に入った福豆を、「南無妙法蓮華経、福は内」の掛け声でまき、さらに堂内をすみずみまで巡りながら豆をまいた。

天狗の面つけ神刀振う
天心教

天心教（天元教主）は2月3日午後2時から、大阪府羽曳野市の古市本庁の神前で「星祭節分大祭」を斎行した。

斎主の天元教主と斎員3人が入座し、修祓、各種祝詞を奏上した後、「星祭詞」を奏上した。

続いて天元教主が天狗の面をつけ、平伏する参列者などに向かって真剣の神刀を振って、除魔招福を願った。

玉串奉奠の後、豆まきが行われ、参列者にぜんざいと豆茶が振る舞われた。

天元教主が「聖教」に立った後、護摩祈祷に移り、諸願成就を祈願した。

厳かに「特別祈願文」奏上
天真教

天真教（神出修二教主）は2月4日午前10時から、三重県伊賀市の平安城神殿で、「星祭祈願祭」を斎行した。

神出修二教主が修祓を行った後、祈願者の名前を一人ずつ読み上げ、「星祭祈願祭祝詞」と「特別祈願文」を奏上し、諸願成就を祈った。この後、「みかぐら歌」を奉唱し、特別祈願者の代表2人が玉串を奉奠した。

「福寿豆まき」では、「鬼は外」と参列者全員の掛け声に合わせて、神出教主と代表者が城外に一度豆をまき、続いて「福は内」と唱えながら、城内の参列者に豆をまいた。

響く掛け声と太鼓の音
大和教団

大和教団（保積秀胤教主）は2月7日午前11時から、仙台市の大國神社祈祷殿で「節分厄除祭」を斎行した。祭儀に先立ち、保積秀胤教主の二度目の「壱千日神行・百日百座火祭勤行」を撮影したビデオを上映。この後、保積志胤統理の斎主により火祭祈祷を厳修し、開運招福に導く加持が祈願者に授けられた。

祭儀の後、保積統理と祭員により特設舞台から神矢が放たれ、豆まき。祭員に続き、「おだいこくさま」の衣装をまとった豆まき所役の教信徒が登壇し、「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外、稔れ、稔れ、稔る」との掛け声と、太鼓の音が鳴り響く中、豆をまいた。

個々の名を読み上げて
法公会

法公会（榊原光徳会長）は2月7日午前10時から、愛知県知立市の総本山で「節分厄除祈願祭」を執り行った。聖仏舎利宝塔、教祖殿で榊原光徳会長と宣教師が読経供養を行った後、本殿に移動し、祈願者一人ひとりの名前を読み上げ厄除祈願の読経供養を厳修した。

榊原会長は法話で、鬼の目に豆を投げて、魔を滅し、一年間の無病息災を祈願するという節分の意義などを伝えた。

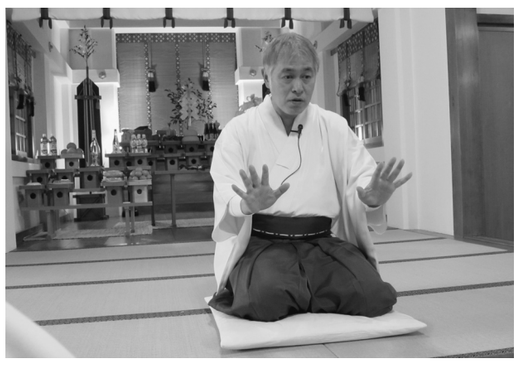
この後、榊原会長のお祓いを受けた裃姿の会員代表者が、「福は内」と大きな掛け声と共に豆をまき、満堂の場内が大きな歓声に包まれた。

祈願者の除災を祈念
晃妙寺

晃妙寺（松本晃芳法主）は2月3日午前11時から大阪府枚方市の本部本殿で「節分大祭」を斎行。松本晃芳法主の導師で読経供養の後、団扇太鼓に合わせて題目が唱えられ、松本法主が「九星」で今年の「黒星」などにあたる祈願者の除災を祈念した。

この後、裃姿の信者代表4人が参列者に向かって豆を手渡すようにしながらまいた。さらに、あらかじめ引いたくじにより、5等賞から1等賞まで順に商品が授与された。また2日午後6時から「星祭」が営まれ、境内の一角で諸願成就の護摩木が焚かれた。

「日々、心とモノを大切に」
玉光神社



玉光神社（本山一博宮司）は2月3日午後2時から、東京・井の頭の同神社で「節分祭」を執り行った。

本山一博宮司は「御講話」で「明日は立春。大豆は人間にとって貴重な恵みです。大地の生命力を感じながら行うのが、節分の儀式です」と述べた。

また「感じる力」は、心と体が合わさったところに生じるとし、「宗教は、心とモノが統合した世界。その両方を大切にして、毎日を過ごしてください」と参列者に説いた。

信者に「形代」を用いて祓い
日本神宮本庁

日本神宮本庁（中島秀典管長）は2月3日午前8時半から、北海道帯広市の帯広明神大社で「節分厄祓祭」を斎行した。

中島秀典管長はじめ4人の神職が、参拝者が訪れる度に祭儀にあたり、祝詞奏上の後、神職が信者一人ひとりに「形代（かたしろ）」を用いて祓いを行い、「御札」を授けた。また、厄年の信者には「御守り」「破魔矢」が授けられた。当日は晴天に恵まれ、午後6時まで絶え間なく多くの参拝者が訪れた。また、翌日以降の節分厄祓の参拝者にも、神職らが真心を込めて対応した。

信者へ福を呼ぶ「宝銭」
大和教

大和教（保積敬子教祖）は2月3日午前11時と午後5時、宮城県塩釜市の本庁で節分祭「節分追儺の御祭（みまつり）」を斎行した。

神殿での神事では、祭主の保積敬子教祖が祭員と共に信者らの名前を読み上げ、厄除けと除災招福、諸願成就を祈願した。保積教祖があいさつ。「厄を逃すためには、大神様のお力を頂くと同時に、自分たちも努力することが大事です」と語った。

この後、修練道場で追儺式を行い、保積教祖はじめ全員が交代で豆をまき、保積教祖は福を呼ぶ「宝銭」をふるまった。

独特の「三声一声」の掛け声
解脱会

解脱会（岡野聖法法主）は2月3日午後1時から、埼玉県北本市の御霊地の解脱練心館で「節分会」を開催した。はじめに祭壇に祀った福豆を祓い清め、拝礼行事を行った。続いて岡野聖法法主があいさつ。解脱会独特の豆まきの掛け声で「福は内」を4回唱える「三声一声」について、岡野聖憲会祖の言葉を引用して述べた。

来賓祝辞の後、裃をまとった年男が豆まき。「三声一声」の掛け声で豆をまくと、会場は大いに沸いた。豆まきの合間には獅子舞いの披露も。豆まき後は景品抽選会も催され盛況となった。正午からはチャリティーバザーが開かれ、浄財は北本市の社会福祉協議会に寄託された。

晴天の下、特設舞台で
真生会

真生会（田中庸仁会長）は2月7日午前10時半から、岐阜県岐阜市の総本山真生寺で「厄除け節分祭」を執り行った。田中庸仁会長を導師に、本堂で厄除祈願・供養読経を厳修した。この後、田中会長があいさつで「厄年の人は人様、家族のお役に立つ一年にしていただきたい」と説いた。

午前11時半から境内の特設舞台で豆まきとなり、晴天のもと、田中会長はじめ厄除祈願を受けた会員らの豆まき隊が2回、威勢よく「福豆」をまいた。当日は多くの地元市民も参拝、豆まきに参加し福豆を授かった。

福豆、みかん、餅を手渡す
修養団捧誠会

修養団捧誠会（出居徳久総裁）は2月8日午後2時から、東京・池袋の本部平和郷で「第52回追儺式」を執り行った。

神前での礼法、「いのりのことば」、修祓の儀と続き、玉串奉奠。「福頒（ふくわけ）」に移った。出居徳久総裁が大きな声で「鬼は反省　内は感謝　福は実行」と声高らかに発声。出居総裁と「お福さん」「大黒天」、年男年女が場内を巡り、会員一人ひとりに教訓を表す福豆（まめに働く、みかん（未完であるので人格の完成に努力する）、餅（粘り強い気持ちを持ち続ける））を手渡した。

和解による平和に向けて

WCRP日本委 新春学習会を開催

対話が心の壁 取り払う

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（庭野日鑛会長、杉谷義純理事長）は1月27日午後2時から、東京・杉並の立正佼成会法輪閣で、「対立から和解へ―戦後の歩みをふまえて」をテーマに新春学習会を開催した。

杉谷義純理事長は開会あいさつで、「和解は宗教者にとって重い課題」と述べ、WCRP日本委平和教育タスクフォース責任者の山崎龍明氏が趣旨説明。「平和の問題は生涯かけて取り組むべきこと」と述べ、宗教者にとって和解による平和実現の重要性を強調した。

基調発題を明治学院大学名誉教授で臨床心理士の井上孝代氏が行った。

井上氏は、格差社会や核家族化、情報化など現代のストレス要因を示し、現代人は心理的に「自己肯定」「安心できる居場所」を求めており、「対話型（共感型）コミュニケーションが必要」と述べた。

対話型コミュニケーションの要点として、耳と目と心で相手の話を聴く「傾聴」と、相手を尊重し理解する「共感」、代案を創造すること。対立から和解へと導くための「3R（解決―Resolution、再構築―Reconstruction、和解―Reconciliation）」。さらにノルウェーの平和学者、ヨハン・ガルトゥング博士の説く「和解への12の手法」などを解説した。

そして和解のために相手との違いに気付き、互いに尊重、受容していく「共感力」を育てることの大切さを説き、「対立する両者の間に共感が生まれたときに、お互いの心の壁が取り払われ、和解へ道が開かれる」と述べた。

基調発題に続くパネルディスカッションでは、井上氏を交え、WCRP日本委平和教育タスクフォース運営委員で関西学院大学教授の山本俊正氏をコーディネーターに、同タスクフォースメンバーで清泉女子大学教授の松井ケティ氏と、WCRP日本委青年部会事務局長の坪内教至氏（立正佼成会）が発題。

松井氏は、共感や思いやりを大切にする南アフリカの精神文化「ウブントゥ」と、ハワイ先住民族の問題解決法「ホ・オポノポノ」などを挙げ、信頼関係の回復に共感と対話が重要であることを解説した。

坪内氏は、WCRP青年部会及び立正佼成会が第二次世界大戦の戦地となったフィリピンの人々との1973（昭和48）年からの交流史を説明し、慰霊と懺悔を重ね反日感情を乗り越え友情を育み、フィリピンの教育支援事業の協働へとつながった経緯を話した。

質疑応答では、対話による和解やフィールドワークなど実践の大切さ、宗教者の「祈り」の有効性などについて提起する発言が続いた。

基調発題の後、4人が登壇し、パネルディスカッションが行われた

厚生年金加入で公聴会

東京都宗教連盟が定例理事会

東京都宗教連盟（都宗連、新美昌道理事長）は1月28日午後4時から、東京都内で平成28年第1回定例理事会を開催した。

新美昌道理事長のあいさつの後、東京都生活文化局都民生活部管理法人課宗教法人係係長の夏目俊一氏が、「都庁・宗教法人係からの連絡事項」を報告。マイナンバー制度に併せて各宗教法人にも法人番号が付与されたことに対する都庁の対応を説明した。

諸報告の後、厚生年金加入問題について、全日本仏教会（全仏）の奈良慈徹総務部長を講師に公聴会を開いた。奈良氏は、昨年から日本年金機構により、全国の寺院に厚生年金加入促進の働きかけが行われたことに対し、全仏が折衝に当たってきた経緯を説明。厚生労働省や文化庁宗務課とも会合を重ね、昨年7月6日から加入促進活動は「一時休止」状態となっていると報告した。

奈良氏は、厚生年金が「宗教法人に適しているかは問題がある」と指摘。年収300万円以下の寺院が全体の約6割で、厚生年金及びそれに付随する健康保険などを負担することが難しい現状や、算出方法が複雑で住職一人で運営している寺院等の事務負担が大きいことなどを説明した。

また、日本年金機構は宗教法人を中小企業などと同じ事業所として、住職等は「従業員＝雇用されている人」と捉えているが、住職は宗教法人の役員であり雇用されていないなど、宗教法人の特性が理解されていないことに対して疑義を呈した。

この後、質疑を交わし、同様の問題が神社など他の宗教法人にもあることや、都宗連としての対応などについて意見交換を行った。

若者の自殺対策 背景にある問題を注視

東京自殺防止センター講演会

NPO法人・東京自殺防止センター（加藤勇三理事長）は2月20日午後2時から、東京・中野の中野サンプラザで、東京都との共催で公開講演会「若者の生きづらさと支援」を、国立精神・神経医療研究センターの松本俊彦氏を講師に開催した（写真）。

全国の自殺者数はバブル崩壊後の1998（平成10）年に3万人を超え、2010（同22）年まで約3万人で高止まりをみせてきたが、以降減少傾向にあり、昨年は2万5千人を割り込んだ。一方で10代から30代までの若者の自殺者数は、全体の減少幅に比べ緩やかで、自殺対策全体の中で、重要な課題となりつつある。

松本氏は自傷行為（リストカット）を行う若者について、各種調査のデータを示しながら解説。リストカットを行う理由について、「周囲へのアピール」という理由はそれほど多くなく、不快感情の軽減が最も多い」「リストカットは死ぬためではなく、辛い経験を乗り越えるためのもの」などと述べた。

その上で「からだの痛み」が「こころの痛み」を和らげる効果がある場合もあるが、「もともとの問題は解決されず、さらにひどくなる可能性もある」と指摘。さらに、依存症を引き起こし、「生きるためのものであったのに、結果的に死に近づいてしまう」と分析した。

解決のためには「上から目線の道徳的説教でなく、信頼してもらえる大人になり、背景にある問題を聞いてあげること」と語った。

九条は仏の願い 殺さない・殺させない

「宗教者九条の和」が憲法講演会

憲法9条を守り輝かせようとする諸宗教者で組織する「宗教者九条の和」（事務局＝東京都渋谷区、日本山妙法寺内）は2月20日午後零時半から、東京都文京区の東京カテドラル関口教会で「第8回憲法講演会」を開催。「憲法九条は仏の願い―殺さない・殺させない」をテーマに、二人の僧侶が講演と対談を行った。

開会にあたり、岡田武夫カトリック東京大司教と、宗教者九条の和呼びかけ人で浄土真宗本願寺派僧侶の山崎龍明氏があいさつ。9条を守り、再び戦争という過ちを犯さないことが宗教者の役割であることを述べた。

講演は、念仏者九条の会共同代表で浄土真宗本願寺派僧侶の小武正教氏が、広島県三次市にある自坊・西善寺の戦前、戦中、戦後の歴史をたどり、戦争が教団、寺院、門徒にもたらした惨禍を語った。

大正時代からの自坊の「過去帳」には軍人を別格に扱う院号が記され、戦中は本願寺派が教団を挙げて戦争協力を行い、金属供出令で梵鐘・仏具を供出。現在も門徒の仏間には軍人遺族の遺影が飾られ、兵士として戦地に赴いた祖父（住職）は多くを語らなかったことなどを、写真や資料を用いて説明。「戦争とは、不殺生、つまり殺さない・殺させない、兵（ひょうが）戈無用との仏の本願に背くもの」と述べた。

兵士として戦地に赴いた体験を持つ門徒が戦後40年余を経て、「本当は戦争に行きたくなかった、生きたかった」との思いを話してくれた体験を述べ、戦中・戦後に本当の思いを押し殺さなければ生きていられなかったとして、「どんなことがあっても、戦争は諸手を上げて止めなければならない」と訴えた。

講演の後、小武氏と、宗教者九条の和呼びかけ人で真宗大谷派僧侶の石川勇吉氏による対談が、参加者の質問に答える形で行われた。その中で、自民党の憲法改正草案の20条（信教の自由・政教分離）について、小武氏は「国が宗教をコントロールすることになるのではないか」、また石川氏は「信教の自由、内心の自由が規制されることがあってはならない。そうした声の積み重ねを大きくしていきたい」と危機感を表した。

参加者の質問に答える形式で対談を進める小武氏㊧と石川氏㊨

首相靖国参拝訴訟 憲法判断せず棄却

大阪地裁

安倍晋三首相が2013（平成25）年12月、靖国神社を参拝したことを憲法の政教分離に違反し、平和に暮らす権利（平和的生存権）が侵害されたとして、国内外の戦没者遺族ら765人が安部首相や国、靖国神社に損害賠償などを求めた訴訟の判決が1月28日、大阪地裁であった。

佐藤哲治裁判長は「原告らの法的利益の侵害は認められない」として請求を棄却した。判決では、首相の靖国神社参拝が政教分離に違反するか、また参拝は公的か私的かの判断を示さなかった。判決を不服として原告側は388人が2月9日、大阪高裁に控訴した。

安倍首相の靖国参拝をめぐる同様の訴訟は、東京地裁で審理が進められており、2月19日に第7回口頭弁論が行われた。

新刊紹介

地球社会の新しいビジョン ―心身・霊性・社会

樫尾 直樹・本山 一博 編

集団と個人は対立する。集団としての利益と個人の利益は異なる―。これをどうバランスをとり、調和を図っていくのか。スピリチュアリティ（霊性）という側面からこの問題に取り組むというのが、本書の趣旨である。

本書は、2014（平成26）年3月16日に開催されたIARP（国際宗教・超心理学会）主催の「本山博先生米寿記念」公開シンポジウム「地球社会の新しいビジョン―心身・霊性・社会」での講演とパネルディスカッション、登壇者へのインタビューなどを所収したものである。

公開シンポでは、宗教界から妙智會教団法嗣の宮本惠司氏が登壇し、「『先祖供養』と『個人と社会』の調和を考える」と題し発題している。宮本氏は妙智會教団の教旨、先祖供養、「縁起」の思想について解説した上で、先祖と、直接に関わってきただけでなく、教義的にもキリスト教は戦争を必ずしも否定していないという。

愛国と信仰の構造 ―全体主義はよみがえるのか

中島 岳志・島薗 進 著

戦後70年が経ち、多様な観点から「国のかたち」やあり方が問われている。本書は、現代が戦前と同じく閉塞感に苦しむ時代であるとして、国のあり方や人々の生き方をめぐる「愛国」と「信仰」について、気鋭の政治学者、中島岳志氏と宗教学の泰斗、島薗進氏が対談により分析する。

明治維新からのナショナリズム、親鸞主義や日蓮主義がその中で果たした役割、民衆が国家神道的価値観を身につけるプロセスなどを紐解き、現代における政治と宗教ナショナリズムの問題を検討している。

戦前の天皇機関説問題と現代の安倍内閣による安保法制の「強行採決」、この二つが「立憲主義の危機」として並列に語られる。前者の「危機」から全体主義、戦争へと至ったことから、この二つの危機の何が同じで、何が違うのか、原因は何かを問わねばならないという。

島薗氏によれば、日本はもうすでにいくつかの局面で全体主義化しているという。秘密保護法の制定、マスコミの統制などによる「上から」の全体主義が起こっていると指摘する。中島氏は「アメリカという後ろ盾を失った時、その不安に日本人が耐えられないのではないか」として、そのときに民衆がナショナリズムを強め、「下から」の全体主義が起こると予想する。

このように、中島・島薗両氏は、全体主義の復活に警鐘を鳴らし、現政権のあり方、それにくみする宗教に批判的であり、立場は明確である。

しかし、明治維新からの歴史を振り返ることで、ナショナリズムの問題が単純に「右翼」「左翼」と割り切れないことも理解でき、過去を通して現在の問題を見通すことができるものともなっている。（集英社新書　272頁　定価842円）

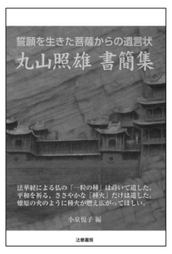
丸山照雄 書簡集 ―誓願を生きた菩薩からの遺言状

小泉 悦子 編

宗教はじめ政治、経済、環境問題まで幅広い分野で、歯に衣着せぬ発言と実践にわたり「行動する仏教者」として生涯を貫いた丸山照雄氏。

2011（平成23）年、行年79歳で逝去したが、丸山氏と親交の深かった人々や、薫陶を受けた由縁の人々によって、13（同25）年、遺稿集『認識の仏教』が発刊されたが、本書はそれに続く遺作集である。

本書に収められた書簡は、30年にわたり丸山氏に供養の品や布施を送り続けた一人の篤信者に宛てた200余の書簡から、93通（1987～2011）を選び編んだもの。編者は、「丸山照雄先生の遺稿集を出版する有志の会」代表の小泉悦子氏。小泉氏は丸山氏と同郷（山梨県身延町）で、幼少期から家族ぐるみで親交があり、熱心な日蓮信奉者である。



本書に収められた書簡は、アジア仏教徒の連帯を目指したネットワークづくりや日米安保、政界と宗教界との攻防、オウム真理教事件、東日本大震災など、その折々に丸山氏が感じ、思索したことが思いのままに綴られている。

宗教評論家・丸山照雄としての論考・批評とは異なり、平易な言葉で篤信者への優しい心配り、時には感情も露わにした言葉もみられ、丸山氏の人柄が表われている。

晩年の書簡では、「私の身体が終わっても、『種火』（たねび）が残るような形で、仕事をしたい」と記している。当時の「日本人の沈滞」を憂いての言葉だが、書簡は、宗教の歴史をみると種火が有れば、時代の風の吹き様によって種火は燎原に燃え広がる―と続ける。70歳を越えてもなお熱い丸山氏の仏教徒としての信念、誓願を感じさせる。

巻末には未発表の原稿、絶筆、丸山氏の略年譜も付している。（法華書房　四六判　298頁　定価2700円）

構築された仏教思想 道元 ―仏であるがゆえに坐す

石井 清澄 著

『構築された仏教思想』シリーズの第5弾。本シリーズはこれまで、ゴータマ・ブッダ（釈尊）、龍樹（「空」の思想）、法蔵（華厳教学）、親鸞を取り上げている。本書は、中国禅との比較をしつつ、道元の思想独自性を明らかにしようとするもの。

著者は、道元は中国禅をそのままコピーしたのではなく、坐禅を中心とした「只管打坐」によって、中国禅の内包する問題点を克服したものであると説明する。「日常生活全般＝仏道修行」と捉え、「坐禅以外の修行を重視」する中国禅の伝統的修行観を道元が超克していくにあたり、自身が伝統的な禅問答の革新的な解釈をしていく。著者は、日常生活重視の禅から坐禅の実践の重視の禅に改変されていく様子を、中国禅と道元の解釈の比較によって解き明かす。

それは「人は本来仏である」という見解に偏り、仏道修行の目的を見失っていた中国禅に対して、道元は仏道修行を「仏として不断に行うべきこと」として捉え直し、「仏である」ことを座禅中心の修行によって証明していこうとするものであった。

本書の構成は禅思想の概説、道元の生涯と主要著作の解説を経て、道元禅の特徴について第3章から4つの章にわたって検討する。

そして終章では、主著『正法眼蔵』から「家常」巻の一節を取り上げ、道元禅読解の実践篇として、中国唐代禅～宋代禅～道元禅にわたる解釈の変遷を理解するためのノウハウを紹介している。

宗派や出家在家という線引きを越えて、「仏道を歩むとはどういうことか」を読者一人ひとりに問いかけ、道元の修証観（修行と悟りの関係についての考え方）の核心部分について明解に書き下ろされた一冊。（佼成出版社　B6判　184頁　定価1512円）

キリスト教と戦争 ―「愛と平和」を説きつつ戦う論理

石川 明人 著

キリスト教は約23億人の信者をもつ世界最大の宗教であり、よく知られているように「愛（と平和）」を説く宗教である。しかし、世界中で戦争を行うアメリカは、皮肉なことに世界で最も熱心なキリスト教国の一つであり、「テロとの戦い」を繰り広げたジョージ・W・ブッシュ元大統領が「回心者」（信仰によって人生の立ち直りを経験した者）であることも有名なエピソードとして語られる。

十字軍、宗教改革などで知られているように、歴史的事実として、これまでキリスト教界が戦争に積極的スチャンは「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という聖書の一説を、自らの慰めとした。

「正戦just war／聖戦holy war」「良心的兵役拒否」「宗教戦争」など、重要なキーワードがコンパクトに解説されている。戦争へのキリスト教（宗教）の表面的な関与に言及するだけでなく、その歴史的展開を丁寧に跡付け、教義と戦争の密接で複雑な絡まりを解きほぐしている。

著者も述べているように、宗教が戦争の原因であるという場合、多くは誤解が含まれている。しかし宗教が事態を深刻化させた事例は枚挙に暇（いとま）がない。歴史的事例に学び、その危険性を理解することは、今後どのように振る舞うべきか考える際の手がかりになるだろう。（中公新書　256頁　定価861円）

いのちを"つくって"もいいですか? ―生命科学のジレンマを考える哲学講義

島薗 進 著

本書では、バイオテクノロジーの進展により本来の目的である治療を超えた医療である「エンハンスメント」の課題と、未来の社会を生きるための生命倫理について読者とともに「哲学的」に考えていくもの。

欧米では、バイオテクノロジーと生命倫理の関係を問う議論は活発になされており、「人間の尊厳」「個人の命の神聖性」というところに焦点が置かれているという。

しかし、議論の深層にはキリスト教や西欧の伝統文化的視点が深く関わっており、「文化的な相違」によって日本人の思考様式と欧米的な生命倫理に齟齬（そご）が生じていることを筆者は指摘している。

その中で著者は「限りあるいのち」という自覚にたち、「つながりのなかのいのちの尊さを重視する」という論点を示している。

iPS細胞による再生医療、出生前診断、遺伝子治療やロボット技術など、最新のバイオテクノロジーに根ざす現代医療は、「より健康に、より長く生きたい」という願いを着実に実現しつつあるが、従来不可能だったことが「できてしまう」ことで、これまで想像しなかった課題に我々が直面しつつある。

文化の違いや歴史的経験の違いによって、一見、日本と欧米の生命倫理に隔たりがあるように見えるが、これを比較検証し、それぞれの文化や歴史の理解をさらに掘り下げていくことで、共通の地盤を見つけようとする一冊。（NHK出版　四六判　238頁　定価1404円）